

発達障害がある子どもの支援などを行う京都府宇治市のNPO法人「アジール舎」(亀口公一会長)は4〜7月、被災地に2000点を超すおもちゃを届けました。7月に福島県を訪れた事務長の原田康信さん(37)は「子どもたちが喜び、大人たちにも笑顔が戻ったのが印象的でした」と話しています。

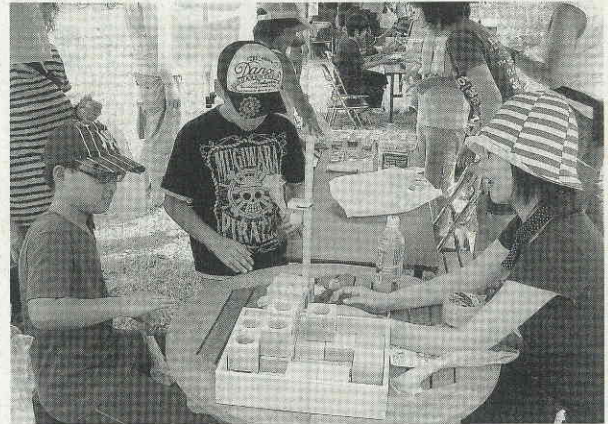


NPO法人「アジール舎」
事務長

原田 康信さん

支援のきっかけは、震災後に見たテレビニュースでした。避難所で母親に抱かれ、顔を伏せる子どもの姿に、亀口さんらは「何事もなかったと必死に言い聞かせているようで、早く手を差し伸べなければ」と感じたといいます。
子どもの心身の発達に「遊び」

支援だより



原田さんが届けた木のおもちゃで遊ぶ子どもたち(7月24日、福島県会津美里町で)＝アジール舎提供

2014年9月8日(水) 読売新聞 朝刊
子どもに笑顔 おもちゃ2000点

は欠かせません。遊び相手の人たちが駆けつけるにも、すぐにできないため、「おもちゃを送ろう」とホームページなどで呼びかけました。京都府内を中心に全国からぬいぐるみやカード、ミニカーなどが続々と寄せられました。

これらは、交流のある東北地方のNPOなどを通じ、各地の避難所や仮設住宅に送られ、「子どもたちが喜んでいます」との礼状も届けられたそうです。原田さんは7月24日、送り先の一つ、福島県会津美里町の仮設住宅に向きました。同町には、福島第一原発か

ら半径20キロ圏内の警戒区域に一部が入る同県楢葉町の住民が避難しています。

ちょうど、仮設住宅わきの広場で「ならば&みさと交流パーティ」という催しが開かれていました。原田さんは、穴の開いた積み木に球を通して遊ぶおもちゃを持参。小学生ら約50人が「難しいな」「できたぁ」と熱中する無邪気な姿を見て少し安心したそうです。

一方、原田さんは地元NPOの関係者が「冬は雪かきが大変」と話していたのが耳に残っていました。季節が変われば、子どもたちを取り巻く環境も変わります。原田さんは、子どもたちが心豊かな時間を過ごせるようなお手伝いできればと考えています。